

編集後記

ようやく編集・校正が終わり、印刷・製本へとまわすところまでできました。

校正のため、鯨岡先生のご講演や3人の先生の話題提供、それから質疑応答の中身を何度か読み返しました。率直に言えば、「鯨岡理論」について当人に語っていただき、また当人を目の前にして議論するという他ではない試みをよくやったなど、その無謀さに苦笑いすると同時に、このタイミングでやったことはよかったと思っています。

鯨岡先生にご講演いただき、さらに質疑応答に加わっていただいたことは、今回の企画では欠かせないことでした。そのご厚意に感謝いたします。

鯨岡先生のご講演のなかで、そして質疑応答のなかで、鯨岡先生が「関係発達論」とその実践方法である「関与しながらの観察」および「エピソード記述法」を作り上げていく過程で、周到に練り上げてこられたことが改めて確認できました。またご講演のなかで、いくつも私自身の研究実践に関連する事柄がありました。

特に、対象化してとらえなければ学問にならない一方で、誰かとかかわりその場を生きなければならぬことを対象化してとらえることが、実際誰かとかかわりその場を生きていることから乖離してくる問題をどう考えていくのか。この点は私自身とる研究方法（一緒に歩くという方法）における課題と重なり、改めて考えていかなければと思い直した次第です。今後さらに、鯨岡理論から学んでいかなければなりません。

そして森岡先生、遠藤先生、大倉さんから話題提供をいただきました。企画の段階で意図していたわけではないのですが、鯨岡先生が60代、森岡先生が50代、遠藤先生は40代、大倉さんは30代とそれぞれ世代が異なっています。また3者とも異なるポジションから、そして異なる話題から「鯨岡理論の現在」について語っていただきました。鯨岡理論の現在がいろんな方向からとらえることが出来たのではないかと思います。

話題提供順に振り返れば、大倉さんの門下生ならではの鯨岡理論に関する内在的な話題提供は、今回の企画に欠かせないものだったと改めて思います。関係発達論をよりどころ

にして自ら研究を実践している大倉さんの話題提供は、鯨岡先生当人が語る鯨岡理論とは異なり、大倉さんが鯨岡理論と付き合いってきた歴史を話していただいたので、鯨岡理論の「これまで・現在・この後」を知るうえでふくらみを持たせるものであったように思います。意地悪をいえば、鯨岡先生が大倉さんを「わが研究室の優等生」と評していましたが、反抗期の大倉さんを見てみたいと思ったりもしました。ただ大倉さんが話題提供の冒頭で吐露していましたが、恩師の前で恩師の理論について語るということがどれだけ荷が重いことか、その課題に十分すぎるほど応えてくれたことに感謝いたします。

遠藤先生にはご自身における「鯨岡理論」の遍歴、およびご自身の研究領域である愛着理論と鯨岡理論の対話を話題として提供いただきました。遠藤先生は、鯨岡先生と同じ発達心理学、主に乳幼児期の母子関係に注目しておられますが、遠藤先生ご自身「関係発達論」を実践しているわけではありません。けれども、ご自身が鯨岡理論と付き合いってきた歴史、そして現在ご自身の研究領域との関係を率直に、そして整理されたかたちで語っていただいたことから得るものは大きかったように思います。内輪の話を披露することはマナー違反なのですが、シンポジウム後、遠藤先生が私に「鯨岡本を僕ほど何度も読んだ人間はいないと思う」という主旨のことを話してくださいました。何度読んだかという問題ではなく、分かるまで繰り返し読んできたという遠藤先生の自負は、私の襟を正すものでした。本題から逸れましたが、遠藤先生から提供された話題は、今回の企画において発達心理学における鯨岡理論の価値を理解する上で、欠かせないものでした。話題提供の時間が足りないぐらい気合の入った話題提供をしていただいた遠藤先生に感謝いたします。

森岡先生には企画の準備段階からお付き合いいただき、メールにて何度もやりとりさせていただきました。森岡先生が「それは面白い！」と乗ってくださらなければ、本企画を進めていたかは分かりません。森岡先生には、心理学思想史における鯨岡理論の位置づけと、鯨岡理論の独自性について話題提供をいただきました。シンポジウムにて森岡先生をご紹介する際に話したことですが、森岡先生が話されること・書かれることはとても繊細なことを扱っておられていて、今回鯨岡理論の独自性においても、特にそのような部分について言及していたように思います。このセンスは代えが利きません。また私は「心理学思想史に位置づけたい」といった大それたことは直接言っていないはずですが、それはともかく、今鯨岡理論を心理学思想史に位置づけることが出来る人はとても限られると思います。いろいろな役割を涼しい顔をして担ってくださった森岡先生に感謝いたします。

最後に、本シンポジウム・本雑誌の発刊を支えてくれた当研究会を共同で主宰する荒川歩さんに感謝いたします。荒川さんがいなければ、シンポジウムの開催も雑誌の発刊も実現しませんでした。

またシンポジウム当日手伝ってくださった今尾真弓さん、河野直子さん、それから参加者の方々に感謝いたします。(平成 21 年 3 月 11 日 松本光太郎記)

